

東洋的時間について

九 鬼 周 造 著
和 久 信 章 譯

もし「東洋的時間」なるものを語る権利があるとすれば、輪廻の時間の問題に外ならぬと思ふ。輪廻の時間とは繰り返す時間、週期的な時間である。しかしこの時間の觀念に着手する前に、時間一般の特色を明にすることが必要である。時間とは何であるか。時間は意志的なものである。私が時間を意志的なものであると言ふのは、意志的なものが存在しない限り時間は存在しないからである。机や椅子には時間は存在しない。もしそれらに時間が存在するとすれば、それは意識——それが意志である限り、それらに時間を與へたからである。唯々意志に、意識に關係してのみ机や椅子に時間が存在する。かゝる時間の觀念は、例へばギョウに於て見出され

る。彼にとつては時間は意志とその目的との隔離である。「所求と所有との隔り」「未來に向つて先向する内的な見透し」である。それ故「時間の最も重要な特性は『豫料』(anticipation)である」(『時間觀念の發生』第三版、三三頁—三九頁)。同じやうにヘルマン・コーヘンは、時間を特に豫料或は「先取」と解した。彼は系列の觀念は順序付ける働きを豫想すると言ふ。彼によればこの働きは系列を自己の目的として定立するのである。かくしてこの系列は繼起を「繼起すべきもの」として創造するのである。繼起するものは豫料されるのである。それ故「豫料は時間の根本的特性である」(『純粹認識の論理學』第三版、一五四頁)。更に最近マルティン・ハイデツカ氏は「時間

の原始的現象「は未來性である、「關心」の先行存在に對應する未來性であると言つた（『存在と時間』三二七—三二九頁）。すべてこれらの考へ方は時間を意志によつて構成されたものと解することに一致してゐる。ベルグソンの純粹持續も亦その例外をなすものではない。彼の『時間と自由意志』から『創造的進化』に到る觀念の展開はそれを立證してゐる。

東洋に於ても確かに時間は意志的なものとして解されてゐる。既に時間に關する若干の古き形而上學的觀念がこれを證してゐる。『シュヴェター・シ・ヴァータラ・ウパニシャッド』に言ふ——「ある師は我々に自然について語り、又或る他の師は時間について談る、然し彼らは全く誤つてゐる、宇宙の中にブラーマンの車輪を轉ぜしめてゐるのは神の自在力である。時間は神の自在力より、神の意志より生ずる。更に『バーガヴァードギーター』に於てクリシュナは宣言する。「我は際限なき時間なり。」更に尙ほ他の見地からミリンダ・パーニヤは言ふ、「過去、未來、現在の三世の根源は無明である。無明から意

志の性向が生ずる……。」かくして意志は無知から生じ、意志から時間が生ずる。更に續けて言ふ「決して豫め無明なるものが存在するのではない。かゝる境界が前に存在することは出来ない。」「始めもなく終りもなく車輪は完結してゐる。」しからば完結してゐるこの車輪とは何であるか。ブラーマンの輪とは何か。それは何れも輪廻を意味するものに外ならぬ。

さて輪廻の時間の觀念を討究しやう。輪廻とは無限の再生、意志の永久の反覆、時間の終りなき回轉である。所で輪廻について見出される最も注意すべき著しい場合は、人間が永久に繰り返して同一の人間になるといふ場合である。青虫は一つの葉から他の葉に移り、而もこれが同一の葉であるのである。織女は新しい型を創つて行くが而もこの型は舊のものである。しかし實際これは例外の場合ではない。一般に輪廻は因果の法則、原因と結果との連鎖に従ふ。人間はある存在から他の存在に移る、しかし後者は前者によつて前定されてゐる。或る死者は善行の故に男に再生し、又或る他の死者は惡行の故

に女に再生する。その中には虫となり、禽となり、蚊となる死者があるわけである。外見上、其處に變化があるが、實際に於ては何らの變化もないのである。かくて『ウパニシャッド』は語る、「彼は此處にあつた如く彼處に於てもあるであらう。彼が嘗て爲した如くに未來に於て成るであらう。善因善果、惡因惡果。」更に佛教は説く「かくの如くして彼が養ひ鼓舞した内的性向が彼をこの現世に再生せしめるのである。おゝ弟子達よ、此の如きものが縁である、かくの如きものがこの現世に再生せしめる路である。」男として再生した女は男の徳をもつてゐたのである。彼女は外見上女であつたのに止り、實際に於ては男であつた。女として再生した男は彼の道德的缺陷に於て既に女であつたのである。虫となつた人間は既に虫の生活をしてゐたのである。「カルマ」(即ち所業と道德的酬ひ)の觀念には必然的に同一性の觀念が含まれてゐる。此處に強く支配してゐるものは寧ろ嚴格なる宿命である。一般に因果性は同一性を目標とし、同一性に歸着する。かくて輪廻の教説は同一性の原理、「AはAな

り」の原理に従ふ。人間が同一の人間になる輪廻も亦例外的場合でなく典型的な場合である。其處に存する特殊性は正さしくより徹底的な論理、より深遠な抽象に外ならぬ。かくて視野を擴大し、同時にその論理を徹底的に追究して、全人類は相互の緊密なる關係の中に同様に緊密なる環境と共に週期的に再生するといふ觀念に到達した。一言で言へば、世界は、同一性の狀態に於て、週期的に再生する。「自ら創造したものを彼は再び消耗する——新らしく彼の創造を始めるために」と『シュヴェターシュヴァトラ・ウパニシャッド』は言ふ。『バーガバードギーター』に言ふ——「クンテイの子よ、凡そ存在は「カルバ」の終りまで我が創造力の權限の内にある。カルバの始めに我は彼らを新らしく再生する。」カルバとは正確に言へば次の如き宇宙的期間である、——「世界は亡ぶ、しかしその力は殘存する、これこそ世界が新らしく再生する所の根源である。さもなければ我々は原因なき結果を有つことになるであらう。而もこの創成力は、古きものも新らしきものも、全く別種のものであり得な

い。それ故常に更新する宇宙的中斷に拘らず宇宙の秩序、生物（神、動物、人間）の集團秩序、族續、階級、義務と酬ひとの差別に關しては、一つの宗教的決定が嚴乎として存續する。」

擬て此處に存するのは永久に反覆する同一的時間の觀念である。こゝに體驗せられた時間や測定され得る時間の外に、甚だ奇妙なものであるが、謂はゞ第三の時間觀念が存在するのである。それは希臘に於てピュタゴラス派、殊にストア派の終末觀に採り入れられた觀念——宇宙年の觀念である。世界は細部に到るまで正確に再生すると言はれた。ソクラテスは再びアテネに生れ、再びクザンテイベと結婚し、再び毒を仰いで死ぬであらう……かくして限りなく再生して行くであらう。それ故週期的に繰り返される宇宙年なるものは、もしフツサル氏の用語を使用してよければ、「形相的單一性」「理想的單一性」と解することが出来る。すべての宇宙年は同一的であり、互の中にあつて絶對的に同一的である。その特性は正さしく互の中に於て完全に同一性を保ち乍ら多樣

であり得る所の一つの「エイドス」の事例たり得ることである。故に宇宙年は適切に言へば、個性を特色付けるものではない。従つて宇宙年はライブニッツの「不可別者は同一なり」の原理の支配する領域外にあるものである。といふのはその絶對的同一性は何らその數的多樣性と矛盾しないからである。従つて各の瞬間、各の現在とは異なる時間の同一の瞬間である。時間は一つの直線としてではなく、一つの圓と認められる。即ち矢の形でなく、自己の上に「回轉する輪」の形をもつ。過去にあつたものは未來に於てもあり得、未來に起るものは過去に於てもあり得る。かゝる考へ方の中に存する時間は何らかの反覆し得るものを含んでゐる。かゝる時間の觀念は幻想的であらう、謂はゞクライン・クリツフォードの空間の概念と對蹠的なものであらう。結極それは詩人哲學者ニイチエの時間である。ツアラトウストラは、犬の吠える聲を聞いて彼が未だ生れてゐなかつた遠き昔の、同じ犬の同じ吠聲を聞いた遙かな昔の時間を想起する。かくの如き時間は通常の時間といかなる關係をもつ

か、「脱我」(Estrace)といふ語が、近頃、時間の存在論的現象學的構造を特色付けるために用ゐられてゐる。時間は「脱我」の、即ち「自己外」の存在の、三様相——未來、過去、現在——をもつ。時間の特性は、正確には、それの脱我の總括的統一の中に、即ち「脱我的統一」の中にある。(ハイデッガー『存在と時間』三二九頁)。この意味に於ける脱我は言はゞ水平的である。所で輪廻の時間に關しては垂直的、な他の脱我が存在すると言ひ得るであらう。各の現在とは同一の瞬間を、その一部を未來の中に、他の一部を過去の中にもつてゐる。それは無限に深い厚さをもつた瞬間である。しかし乍らこの脱我はもはや現象學的でなく、寧ろ神祕的である。それ故、脱我なる語は此處ではその古い意義をとり戻してゐる。さて時間の現象學的脱我と神祕的脱我との差違は主として次の二點に存する。先づ前者に於ては各の構成要素の連續性が本質的であるが、後者に於ては反對に、各要素の非連續性が存するのであつて、その要素は一種の遠隔作用によつて結合せられるのみである。第二に、前者に於てはこ

の要素は純粹な異質性を現はしてゐる、従つて時間は非反覆的である。後者に於ては脱我の諸要素は同一的同質性に於てある。従つて可換的である。この意味に於ては時間は可逆的である。これらの本質的差異を認めるならば、水平的な面は存在論的、現象學的脱我を現はし、垂直的な面は形而上學的、神祕的脱我を現してゐるといふことが出来る。そうしてこれらの兩面の交叉は正さしく現實的と假想的との兩面を有する時間の特有な構造に外ならぬ。

多分この週期的時間の觀念には何ら特別なるものは存しないと反對されるであらう。我々が宇宙年を第一年、第二年、第三年等々と數へるといふ事實は宇宙年が相續くものなることを示してゐる。これらは自己の番號をもつて居り可逆的ではない、といふのはこれを教へる目撃者を要するからである。然しながら我々が此の點に固執するならば直ちに始めの假設を不知不識放棄してゐるやうに思はれる。即ち宇宙年は最早や相互の中に於て同一ではない。クザンティベと結婚したソクラテスは最早や

同じソクラテスではなくなる。クザンテイベも最早同一

ではない。二人とも其の時間に一宇宙暦年宛歳をとるであらう。彼等の顔の中に其の時毎に少しづつ憂鬱の増すのを識別するであらう。所が「宇宙年」の觀念は、整合的に考へるならば寧ろ各の「宇宙年」が獨立に始まり絶對的に更新することを意味するものである。更にこゝに言ふ同一性は異なる宇宙年の内容の同一性に外ならぬと言ひ得るであらう。宇宙年其のものは、お互の中に於て同一ではないし、又同一では有り得ない。然し何ら内容のない時間を想像し得るであらうか。その内容を全く抽象して時間の觀念を保持することが出来るであらうか。時間は正さしく其の特性を其の内容から得るのではないか。又時間をこれの内容から分離出来ないことが真であるならば、そして又辨證法の要求に全く従ふことを辭しないならば、宇宙年の觀念は或る時間と他の時間との絶對的同一性といふ逆説的な特質を確かに含んでゐるのである。輪廻の時間—より正確にいふならば宇宙年—は何らかの反覆性を有するものである。夫は全然時間的

でない時間である。

更に正確に云へば問題は特にある宇宙年より他の宇宙年に到る経路に、即ち異つた宇宙年を結び付ける連鎖の中にある。「一人の人間が木から垂れた繩によつて溝を飛越える」如く一つの宇宙年は次の新しい宇宙年に移つて行くのである。この人間は受動的に時間によつて搖られてゐる痴人であらうか。監視人を要する幼児であらうか。寧ろ自ら時間を新しく創造する巧妙なる魔術師ではなからうか。我々は先づ始めに時間は意志的であること、そして意志の存在しない處には時間は存在しないことを確立した。かくして絶對的な孤獨の中にゐる此の魔術師は自己の存在を終らせ又新しく再生せしめ得る力の技を、或は寧ろ意志の技を、もつた眞の魔者である。確かにその死滅と再生との間にはその意志は現實的に存在しない。しかしそれはやはり潜勢的に存在してゐる。問題はこの「潜勢的意志」の觀念に集注するのである。宇宙年の觀念のパラドックスはすべて恐らく此の點に關する思考の曖昧さから生じたものであらう。然し此

は實り豊かな仕合せな曖昧さであつた、と云ふのはそれが壯大な形而上學の思辨を生ぜしめたからである。

次に可能的な反對は「實證主義者」によつてなされるであらう。彼は宇宙年の時間と一種の「耕作的時間」と解する。彼は未開人に於ては時間の觀念は特に週期的であるといふ。例へば種蒔の時期と收穫との間の時間、春の祭と秋の祭との間の時間の如くである。かゝる時間は毎年週期的に繰返す。かくしてこの實證主義者は宇宙年の觀念を説明し得ると信じてゐるのである。然し耕作的時間や宗規的時間と宇宙年の時間との間には本質的な相違が存する。宇宙年は其の全細部に亘つて絶對的な同一性を豫想するのに反して、耕作的或ひは宗規的時間は特定期間の時間の絶對的等質性を要求しない。勿論此の二つの時間の觀念の相違は此の點に關しては無限小にすることが出来る。然しながら兩者の關係には宛も零と數との相違の如きものが存する。兩者の間には常に越えがたい溝がある。此の溝が打破される瞬間に實證主義者は最早自己の原理に忠實なるものでなくなる。

更に耕作的時間或は宗規的時間は年をとる自己の意識的連續性に觸れてゐない。或は之を豫想してゐる。耕作的週期或ひは宗規的週期の復歸を數へるものは常に年をとる自己である。之に反して輪廻の時間に於ては自己は再生と再死の法則に従つてゐる。即ち自分は常に新しく自己の生を再開し、其の爲に又新しく生を終るものである。此處に於ては自己の連續性は幻想的にしか存在しない、それは神祕的瞬間、即ち震ひ戦のく感動を以て自己が自己自身を再認する「深祕な光」の瞬間にしか現はれない連續性である。「自我は存在しない」と同時に「自我は存在する」。我々は常に、聖ナীগサーナとミランダ王との對話を、我々自身に對して繰返さねばならないのである。『大王よ、若し人が燈火を點ぜば終夜燃えてゐるであらうか。』然り、終夜燃えるであらう。『然らば大王よ、初更の焰は夜中の焰と同一であらうか。』否。『では大王よ、夜中の焰は終夜の焰と同一であらうか。』否。『然らば大王よ、抑々、初更の焰と、夜中の焰と、終更の焰は別々のものであるか。』否、焰は同じ

芯にあつて終夜燃えてゐるのである。」かくして宇宙年の時間の形而上學的觀念は比較社會學的な耕作的時間や宗規的時間に還元され得ないのである。要するに發生的經驗的説明は形而上學的時間の觀念の本質に觸れないのである。

既に東洋に起原をもつ時間の觀念を説明した。それでは如何にして時間の解脱の問題が立てられ、又如何にして解決されるか。問題の時間は、其の爲に「四海の水より更に多量の涙を流した」所の輪廻の時間である。人は此の時間を解脱せねばならぬのである。所で佛教的厭世觀は意志の中にすべての惡の、すべての迷ひの、原因を認める。其れ故「解脱」する爲には唯専ら意志を否定せねばならぬ。「寂滅は淨福なり。」この寂滅は「涅槃」と呼ばれてゐるものである。即ち「消滅」「世界の排除」、世界の巨大なる意志の否定である。こゝで或は意志なる語を使用することに反對されるかも知れない。意志なる語の代りに、欲求なる語を使用することが提言されるか

もしれない。この提言に對しては示唆的な例に任かせる。日本の佛教には往々欲求の満足を、それが過度に亘る時でもこれを許されたるものと考へる傾向がある。欲求は、我々が此を幻影と觀じることを學んだ瞬間に無となる。一旦意志が征服され自我の妄想に對する執着が智性や學問によつて消滅されるやゝいなやゝ、満足を求め、欲求は非現實的なものになつて了ふ。「涅槃」は一般に意志―それは無智に本づくものであるが―の否定にある。其れ故、欲求は特に「智者」、「覺者」に對しては一種の幻影として實存し得るのである。然し意志でないこの主體は何であるか。それは智性である。智性が意志を否定する場合に智性は意志其のものではないかと反對されるであらう。これは循環論に陥るであらう。然し又智性は何らか能動的なものを、最小限度の活動性をもつとも云ふことが出来る。涅槃が意志の否定であるといふ理由が此處に存する。而して時間は意志的のものである。故に我々は此の仕方によつて時間を解脱することが出来る。存在の激流は止めらる。

日本に於ては佛教の外に封建時代に「武士道」なる第一の道德的理想が發展した。正義、勇氣、名譽、仁愛——此が武士道の基本的道德である。武士道は意志の肯定である。否定の否定である、或る意味に於て、涅槃の廢止である。夫は自己本來の完成をしか念じない意志である。それ故に佛教にとつては最高の惡であつた意志の永久的反覆が今や最高の善となつたのである。「凡そ世界に於て、否世界の外に於てさへも一般に、思惟し得る限りのすべてのものゝ中で、何らの制限なしに善と考へ得るものは、唯善なる意志の外にない」とカントは言つた。武士道が肯定するものは正に此の理念である。かつて完全に實現せられ得ない處の、そして常に「徒らなる」ことに運命づけられてゐる所の、無限なる自己の努力を更進せねばならぬ。武士道にとつては絶對的價值を有するものは善意志其のものである。滿されざる意志、實現せられざる理想、苦難の生涯、「渴望と苦惱との陰鬱な國土」、要するに永遠に反覆する「失はれた時間」も何ら介意する所はない。恐怖をすてゝ勇敢に輪廻に直面せ

よ。幻滅を明らかに自覺して完成を追究せよ。永遠の時間に於て、——ヘーゲルの用語で言へば *Endlosigkeit* に於て——生きよ。「無際限」(*Endlosigkeit*)の中に「眞無限」(*Unendlichkeit*)を見出せ。涯なき繼續の中に永遠を見出せ。

常に皮相だと思ふのは、希臘人がシシフオスの神話の中に、永久の責苦を認めたことである。彼が山頂迄岩を引き上げると、岩は轉げ落ちる。かくして彼は永久にこれを繰返すのである。此の事の中には不幸があるであらうか、又刑罰があるであらうか、私は之を解しない。私は之を信じない。全てはシシフオスの主觀的な態度に依存する。彼の善意志、常に新らしく始めんとする確固たる意志、常に岩を引き上げやうとする意志は、この繰返しそのものゝ中に全道德を、従つて彼の全幸福を見出すのである。シシフオスは不満足を永遠に繰返すことが出来るの故に幸福になるであらう。これは道德的情操に熱中せる人間なのである。彼は地獄に居るのでなく、天上に居るのである。全てはシシフオスの主觀的

見地に依存する。私も一つの例を挙げたい。

五年前東京の大半を破壊した大地震の直後、我々は東京に首都の建設を始めた。其のとき私はヨーロッパに居た。私は、『何故日本人は百年毎に殆んど週期的に襲はれる大地震に常に繰返して破壊される運命を持つた首都を建設するのであるか』といふ問を受けた。私は此に答へた、『我々日本人の關心は企圖其のものにあつて目的物にはない。我々は今首都を建設しやうとする。地震がこれを破壊するであらう。然し我々は又新しくこれを建設しようとする。新しい地震が百度これを破壊するであらう。然り而して我々は常に再び始めるであらう。これこそ我々が尊重する意志なのである。自己自身の完成を求める意志である。』

以上を摘要する。東洋的時間と呼び得るものは輪廻の時間である。換言すれば反覆する時間であり週期的、同一的な時間である。此の時間から解脱するには二つの方法、二つの手段がある、即ち第一に主知主義的超越的解脱であり第二に主意主義的内在的解脱である。前者は印

度に起源を持つ宗教の涅槃であり、後者は武士道即ち日本の道德的理想である。前者は生きるが爲に智慧によつて時間を否定するにある。或は寧ろ死する爲に、非時間的な「解放」に於て、「永遠の休息」に於て、時間を否定するにある。後者は生きさんが爲に、眞に生きる爲に、眞と善と美との苦しき探究の無限の時間を懼れないことにある。前者は寧ろ不幸を逃避しやうとする快樂主義の歸結であり、後者は、不撓不屈、以て不幸を幸福に轉じ、永久に我々の裡なる神に従はんことを勇敢に決意した道德的理想主義の現はれである。

(右の論文は京都帝國大學教授九鬼博士の "Propos sur le Temps" Paris, 1928

中ノ一篇 "La Notion du Temps et la Reprise sur le Temps en Orient" の翻譯である。脚註は頁數の都合上割愛せねばならなかつた。博士の御許しを乞ふ次第である。

尙ほこの翻譯を許可して下さつた九鬼博士、並びに譯文を修正して下さい恩師下村教授に對して心から御禮を申し上げる次第である。